

昭和八年

(五)

合掌……略……愛欲を超えてたかき愛がお二人を新しく結んでくれたらと切念せずにはいられません。不幸な人同志がほんとに仏の慈悲によつて抱き合う世界を念ぜずにはいられません。よし最後の日が来てもそれをゴマ化したり、逃避しようとしてはなりません。じつと見ている眼があります。忍従のはてこそ彼岸です。暗の中にも白道はある筈です。今こそどちらに行つても白道の上を歩みきらねばなりません。人生は僅かです。道は永遠です。永遠の道を念ぜねばなりません。死の道、滅びの道を行つてはなりません。笑いなさいー笑いなさいー苦の底に微笑を見出しなさい。餓死しても笑われる世界はある筈です。仏ましますではないか。十方恒沙の諸仏の護念証誠があるではないか。

人生は短し、道は永遠なり、永遠の道を歩まずして、何の人生ぞ、笑へ断じて笑へ、念仏して。

昭和八年二月九日

○××様

狂風

(六)

合掌……略……人間のおそるべき宿業であります。然しみ仏の大慈悲はその宿業の上のみそそがれてあります。その大慈悲の中のみ貴女の生きるべき天地がある。貴女の宿業はただちに如来のおん苦しみであります。宿業はあるがままにまかせて、心は金剛の仏地に樹てるのです。光明誌をよくよくお読み下さい。真に勝たねばなりません。念仏の心、その如来に通ずる心をもつて一切を見かえしてゆきましよう。そこは寂しいけれども微笑せずにはいられない世界があります。

光明団は貴女の過去、生きてゆくたつた一つの世界でありました。そして将来もまた貴女の生きてゆくたつた一つの世界でありましよう。一切が破れても破れぬ、念仏の中に静かに一道をふみしめて生きぬいて下さい。

昭和八年七月三日

狂風

○××様

(七)

合掌 我今大阪の同志の家に来りぬ。五島、上森等の同朋陸続として来る。我、そぞろに、松中まさるのここにあらざるを悲しむ。帰心矢の如しとの苦衷察するに余りあり。

我が心、君、ここにあらざるがゆえに君の処にあり。淡々として水の如き父愛、今夕念仏の中に松中まさるを念じて敢えてこの文に託して激励し叱咤す。身、大阪にあると、大野にあるを思うこと勿れ。海山の高恩を如何にする。身、劣愚なりとも大法に値うことを得たり、身、下賤なりとも正法をみ名において獲得することを得たり。広大なるかな本願海、たとえ、怒濤狂乱、微かに明滅するかに見ゆるとも、聖なる燈炬は永遠に輝きて変わることはあらず。その細き腕は弱くとも弘誓のみ手は金剛なり。独りあるかに見ゆるとも、本仏弥陀の智願海、そこに十方無量の諸仏菩薩あり、更に大地に永劫に結ばれたる同胞あり。心強く、合掌して兄妹に仕うべし。使命に生きる日、そこに同胞の讚嘆の声あらん。宿命の扉の前に泣く日に御身は悪魔のとりこたるべし。必勝の一道、合掌して唯進達の一道をたどれ、死すとも尚笑い得べし。このみ教えにして生かさねば生くるとも暗なるべし。

語を寄せて戒む。言々六字より発すべし。一挙手一投足、大信より生かさるべし。時を宝玉とするも泥土とするも、唯汝が六字に生きると否とよるべきものぞかし。唯、南無阿弥陀仏を称うべし。

昭和八年十一月十一日

狂風

松中まさる様